

留学生に俳句を教える

——日本語・日本事情教育の中で——

徳井厚子

1 はじめに

俳句は五、七、五というきわめて短い、縮約された文学作品である。しかし、この縮約された作品の中には、その十七文字という限界の中に無限の世界がひろがっている。一限界と無限—このコントラストの中に、俳句のもつ美しさが秘められているのではないかと思う。俳句は、これまで多くの人々に親しまれてきた。現在、俳句 (Haiku) は日本人ばかりでなく、外国人の中にも多くのファンがおり、世界的に知られるようになってきている。筆者は俳句の研究者でもなければ俳人でもないが、留学生に対する日本語日本事情教育の中で、ここ数年、俳句をとりあげ、指導してきた。

本稿では、「日本事情」の中で筆者が実際に行った俳句の指導例の一例を紹介しながら、「外国人に対する俳句の指導法」を考えてみたい。

2 俳句の魅力と指導の目的

俳句は現在、国籍を超え、多くの人々をひきつけているが、これほどまでに人々をひきつける魅力とは一体何だろうか。

ラフカディオ・ハーンは、『霊の日本』(Ghostly Japan) (1899) で、次のように述べている。(佐藤1987訳)

- 1 日本人にとって、詩は、空気のようにいたるところに存在している。床の間にも、漆器にも衣服にも、詩はかかっている。
- 2 日本人は上流階級も庶民も、すべて詩をつくる。
- 3 俳句は日本の絵画のように、省略された筆遣いで、イメージやムードを喚起する。
- 4 示唆することが大切で、全部をのべてしまった俳句は、「いったきりに」なって軽蔑される。鐘の一突きの音色のように、完全な短い詩は、聞き手の心に長く持続させる霊妙な余韻を漂わせる。

また坂野 (1996) は俳句や短歌などの短詩型の魅力として、「最大の魅力はそのリズムにあるというべきではないか」と述べている。氏は七音は単独でも口調のよい句として「鬼に金棒」「論より証拠」「知らぬが仏」等、ことわざなどでなじまれている、としている。

このようなことが、俳句が国を問わず人々の心をひきつける原因となっているのではないかといえる。

筆者が留学生向けの授業で、俳句を扱うねらいは次の通りである。

- 1 五，七，五という俳句のリズムに慣れる。
- 2 省略された作品から，情景（イメージ）を喚起する想像力を養う。
- 3 自分の描いたイメージにあてはまる言葉を選び，俳句を創作することによって，語彙力を増やす。
- 4 様々な俳句にふれることによって，日本文化の理解をふかめる。
- 5 俳句の創作を通じて自己と向き合う。

筆者は俳句を学ぶには，単にひとつの解釈をもとに鑑賞するのではなく，まず作品と直にむきあい，その十七文字から自分なりにイメージを喚起していく力を養うことが必要であると考えている。そして，俳句を創作する際には，この「イメージ」を喚起していく力がまず必要となる。すなわち，自分の中で，俳句の題材とする情景を，いかに具体的に想像できるか，ということが，創作に影響してくる。また，イメージを喚起する力と同時に言語化していく力が必要である。すなわち，俳句の学習には，図のように，イメージ化していく方向と，言語化していく方向の二つが共に必要であると考えている。

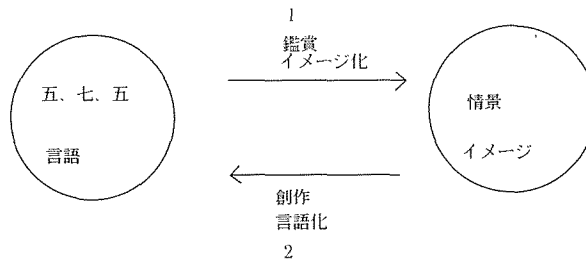


図1

①は，イメージ化，すなわちいわゆる「鑑賞」とよばれているプロセスである。ここでは，ある俳句からきまりきった解釈を一方的にあたえるのではなく，できるだけ自由に，想像力をはたらかせてイメージを喚起させる。授業では学生にいくつかの有名な句をよませ，語彙のみの説明をおこなったあと，学生に自由に情景をイメージさせ，絵をかいてもらった。そして，それぞれの絵をコピーし，お互いに見せ合った。(3-1)

②は，言語化，いわゆる「創作」とよばれているプロセスである。ここでは，俳句にしたい題材のイメージに具体的にあてはまる言葉を選び，十七文字にととのえるということを実際にやらせよう。(3-2)

以下では，筆者が94年，95年度に行なった俳句の授業の実践報告を行う。なお，対象となる学生は，日本語学習歴2～3年目の学部一年生であり，ひとクラスの人数は約25名である。国籍はマレーシア，台湾，中国，韓国，インドネシア，ミャンマー，イランである。また，「日本事情（日本の伝統文化）」の中でおこなったものであり，そのうち本稿で報告する俳句の授業は15コマのうち，3コマ（1コマ90分）を使っている。

3 実践報告

3-1 鑑賞—イメージ化のプロセス—

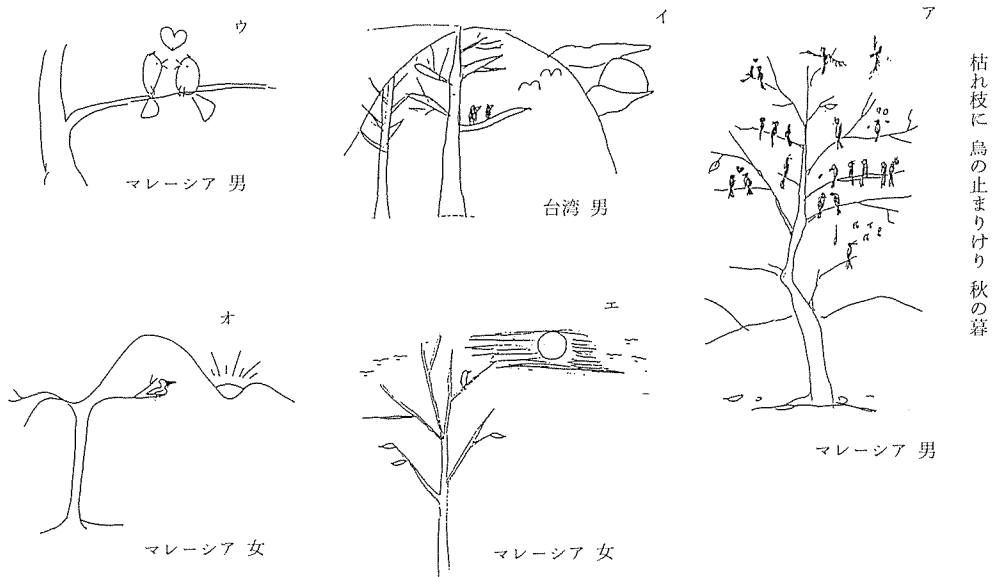
まず、授業では鑑賞（イメージ化）を行なった。

実際には、芭蕉の句をとりあげた。いずれも日本人によく親しまれている有名な句である。

- a 枯れ枝に 鳥のとまりけり 秋の暮れ
- b 古池や かわず飛びこむ 水の音
- c しずかさや 岩にしみいる 蟬の声

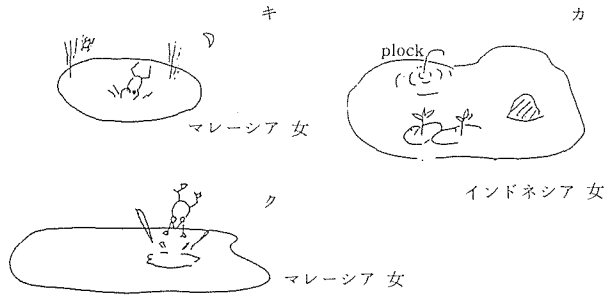
授業では、まず、これらの句を黒板に書き、難しいと思われる語彙の説明を行った。（たとえば、かわずは蛙のことをさしている、など。）そして、次に、これらの句から想像できるイメージを絵にしてもらった。その後、それぞれをコピーし、皆でみせあった。

- a 枯れ枝に 鳥のとまりけり 秋の暮れ



ほとんどの学生に共通していたのは、寂しそうな情景であったが、中にはウのようなカップルの鳥を描いた学生もいた。鳥の数は、アのように沢山の場合もあれば、イヤウのように二羽の場合もあり、またエやオのように一羽の場合もあった。日本語では英語のように単複形が存在しないが、かえってその曖昧性が解釈の多様性を生む。背景についても、月がでている様子をイメージした学生もいれば（イ、エ）、夕日が沈んでいく様子をイメージした学生もいた（オ）。

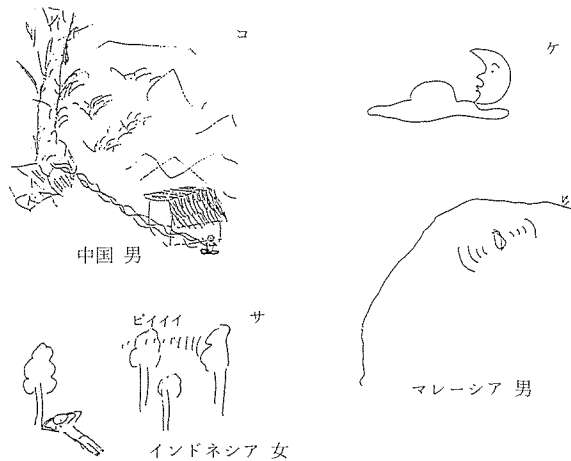
b 古池や かわず飛び込む 水の音



古池や
かわず飛び込む
水の音

これは、一匹の蛙が池に飛び込んでいる絵がほとんどであった。キやクのように飛び込む直前の瞬間をえがいた学生もいれば、カのように飛び込んだ後を描いた学生もいた。また、異なっていたのは、昼の風景を想像した学生と、キのように夜の風景を想像した学生がいたことである。

c しずかさや 岩にしみいる 蟬の声



しずかさや
岩にしみいる
蟬の声

これは、木に止まって鳴いている蟬を描いたものが多かった。興味深かったのは、背景の絵に、学生の育った風土、文化の違いがみられたことである。例えば、中国の学生の場合(コ)、山奥で禅の修行をしている人が描かれていた。また、インドネシアの学生の場合(カ)、木の下で昼寝をしている人の絵がかかれていた。東南アジアで昼寝の習慣があるためだろう。

いずれの絵をみても、十七文字という限られた文字から、個人により、また、学生の背景文化により、様々な情景がイメージされている、ということがわかる。

授業では、「いかに、この十七文字から自分なりに情景をイメージできるか。」ということに主眼をおいている。さらに、この限られた文字から想像される情景は、個人や文化により、実に多様である、ということを理解することもめざしている。したがって、「この解釈のみ正しい」ということは、一切示さない。しかし、学生の絵を紹介した後で、日本で一般的に

解釈されているイメージ（解釈の分かれているものも含めて）を紹介する。

五，七，五という限られた文字がどのようにイメージ化されていくか，ということをとおして，日本語の曖昧性，解釈の多様性，文化の影響に気づくことも大切であろう。このようなプロセスを経て，縮約された世界の中に無限の可能性をみつけることができるのである。そしてそこに，俳句の奥深さを感じることもできるのではないか，と思う。

3-2 創作—イメージから言語化へ—

鑑賞のあと，実際に俳句を創作する。授業では，各自俳句を創作する前に，まず，授業の中で一緒につくる，という協同作業から始めた。

図1によれば，創作とは，すなわち，情景（イメージ）の言語化である。したがって，授業ではまず，イメージを具体的に想像する，ということから始める。

授業では，はじめに「ゆきだるま」という題材をあたえた。なお，このとき，俳句の規則についての説明（季語を入れる，五，七，五で表現する等）もおこなった。そして，次にどんな情景をよみたいか，それぞれイメージをつくり，発表した。

- a 冬の寒い晩，ゆきだるまがじっとたっていて，寒さを我慢していた。
- b ゆきだるまがさびしそうにたっていた。
- c ゆきだるまをみていたら，国にいるお父さんのことを思い出した。

この段階では，なるべく自由に，具体的にイメージを想像してもらう。そして，このあと，協同作業により，それぞれのイメージを言語化し，そのイメージを表現するのに適切な言葉を選んでゆく。言語化の段階では，学生全員が参加し，また教官も補助しながら，最も適切な言葉を選んでいく。この際，「どんな気持ちでよんだか」「どんな情景か」等具体的に質問していき，イメージを具体的に浮かび上がらせながら，言葉を選ぶ。

以下が，a～cのそれぞれを俳句にしたものである。

- a さむい夜 がまんしている ゆきだるま
- b ひとりぼっち さびしくたたずむ ゆきだるま
- c 父の顔 思い出させる ゆきだるま

aは，最初の案が「さむい夜 じっとたっている ゆきだるま」であったが，「じっとたっている」が字余りなのと，がまんしている，とした方が気持ちが伝わる，という意見がでて，このようになった。

bは，最初の案は「ひとりぼっち さびしくたっている ゆきだるま」であったが，「たたずむ」としたほうがさびしそうな様子がよく伝わってくるのと，字数があう，ということでのようになった。

c は，最初の案は「父の顔のようなかんじの雪だるま」だったが，遠い異国に住む父を

思い出している自分の立場をだそう、ということで、このようになった。

こうした協同作業で俳句をつくるねらいは、言語化のプロセスを実際に一緒に体験することにある。この協同作業のあと、個人で俳句を作成する、という宿題を与えた。以下は、学生の作品である。(尚、授業を行うのは十一月頃であることが多いため、そのころの季節をよんだものが多い。)

- d 蝶々や 花から花へ 恋をする (ミャンマー 男)
- e 赤とんぼ 楽しいこども ネット箱 (マレーシア 女)
- f お寺では 除夜の鐘を つきおわり (中国 男)
- g 話してや 冬空の月 母の顔 (マレーシア 女)
- h 山見えず さびしい信濃 風の声 (台湾 男)
- i 山の歌 楓がおどり 秋を飲む (マレーシア 男)
- j 会いたくて ふるさとの友 寒い空 (マレーシア 女)
- k 落ち葉舞い ひとり異国に わび住まい (マレーシア 女)

dは非常に明るく、ロマンティックな性格の持ち主である。fは、日本での、大晦日の様子を思い出して作ったものだろう。gとjは同一人物であるが、故郷の母や、友達を思い出し、さびしいという気持ちが素直に吐露されている。gは、月が、いつのまにか母の顔にみえてきた、というユニークな発想である。そして、物言わぬ月に対して、「話してや」とよびかけている自分の姿のイメージが喚起されてくる。hは、寒く、曇っている日には、山の姿がみえないのであるが、そんな時よんだものであろう。心細さも伝わってくる。iは木曾へバスで見学旅行にいった時よんだ句である。赤々とした楓の様子を「おどり」と表現し、おどるばかりでなく、秋を「飲んで」しまう、という動詞を選ぶことによって、見事に情景を再現している。

学生の俳句に接して感じたのは、彼等は日本語を学んでいる留学生であるが、それと同時に二十歳前後の、非常に感じやすい年頃の青年である、ということであった。おそらく、彼等の持っている「感受性」は、「異国でくらす」ことによって、より鋭敏になっているのではないか、と感じられた。このような鋭い感受性は、俳句をつくるのに重要である。

季語が使われていなかったが、これらの他にも傑作がいくつかみられた。

- l 光陰の 流れに石は 石のまま (中国 男)
- m 灰となり あの日の日記 さようなら (マレーシア 女)
- n アルプスや 立ったり寝たり 美人のごとく (中国 男)

lは、授業で「竜安寺の石庭」の写真をみせたことがあったが、その時の見た気持ちを思い出して作った句で、非常に奥深い。mは、過去の出来事に別れを告げている姿がうつしだされている。nは、雪におおわれた美しい北アルプス連峰をよんだ句である。キャンパスの

ある松本市からは、乗鞍、常念、といった雄大なアルプス連峰が望める。雪をかぶったやわらかい、優しい感じの乗鞍岳や、眼前にそびえたつ常念をみていて、「美人」がたったり寝たりしている、とたとえたのが興味深い。

俳句の創作では、学生たちは、自らそのイメージを具体化する言葉を自ら選ばなければならない。すなわち自ら言葉と向き合わなければならない。この、選んでゆくプロセスで、多くの日本語にであらう。創作は、一種の日本語学習でもある。また、俳句の創作は、学生にとっては、例えば日記を書いて自分の感情をはきだすような、一種のカタルシスのような役目も果たしている、といえよう。創作は、自己とむきあうことでもある。

4 おわりに

以上、実践報告を中心に、俳句の指導法の一例について述べた。

俳句は、短い文学作品であるにもかかわらず、非常に奥深い、豊かなひろがりや可能性をもつ芸術作品である。俳句の楽しみは、一方的に解釈を与えられることというよりむしろ、十七文字のことばからできる限りの想像力をはたらかせ、イメージ化することと、できるだけ具体的にイメージ化した情景を表現するのにもっともふさわしい言葉を選ぶという二つのプロセスを経てはじめて味わうことができるのではないかと、思う。そして、この二つは共に俳句を学ぶために大切なことではないかと考える。

本稿では、留学生に対する日本語・日本事情教育の中で俳句をどうとりあげるか、ということについての実践報告の一例を紹介した。俳句は世界でもっとも短い文学といわれているが、その奥深さは日本人のみならず、外国人もひきつける力をもっている。日本語・日本事情教育の中でもとりあげていく意味は十分あるのではないだろうか。

謝辞 本稿は、日本事情を考える会（平成7年12月・横浜国立大学）での発表をもとにまとめ直したものである。コメントをくださった方々に感謝申し上げたい。

参 考 文 献

- 坂野 信彦（1996）『七五調の謎をとく』大修館
佐藤 和夫（1987）『俳句からHAIKUへ』南雲堂
同（1995）「西洋人と俳句の理解—アメリカを中心に—」『日本語学』95, 14巻
加部 佐助（1995）「外国人の俳句教室」『日本語学』95, 14巻
Hearn, Lafcadio, (1899) *In Ghostly Japan*, Little Brown, Boston.

（1996年11月22日 受理）